

門は、ぼんやりと考えこんでしまいました。自分は、わかりやすく書いたつもりだが、あの本を何人の人が読んでくれるだろうか。あの本を読んで、これらの農業に、役立ててくれる村の人は、何人いるだろうか。新しい疑問がわいてきました。外はしんとして、月がぼんやりかすんでいました。

『会津歌農書』  
うたのうしよ

それから何年かがたちました。肝煎きまじりのしごとを養子ようしにゆずった与次右衛門よじえもんは『会津農書』のつづきとして、月々の農作業のうさぎょうのうつりかわりを、くわしく書き始めました。与次右衛門の研究は、まだつづけられていたのです。

そんなある日、与次右衛門をたずねてきた人がいました。

「お願いがあつてきたのですが、あなたの『会津農書』は、すばらしい内容